

東京スペイン語学研究会, 2020/10/31 (オンライン)

**スペイン語接続法過去 SE 形>RA 形の変化の要因  
言語資料 CODEA, COSER, PRESEEA の歴史地理的分析**

**上田博人**

# 1. 序論

仮説(1)：ラテン語に遡る直説法過去完了 **RA** 形が過去推量形 **RÍA** 形に代わって用いられたのは、両者の音韻の類似(**R**, **A**)と意味の類似（直説法過去完了・直説法過去推量）による。

仮説(2)：歴史的に **SE** 形=文語+伝統：**RA** 形=口語+革新という文体の差異があった。この文体の差異は大小の程度の違いはあるが現代のスペイン語使用者にも残存している。

仮説(3): SE形(古語形)と RA形(新語形)の地理的分布は「分離分布する語形が古く(SE形), 連続分布する語形が新しい(RA形)」という一般的な傾向に合致する。SE形の多地域の分布は SE形→RA形の変化の完了が最近であったことを示す。

## 2. 先行文献

### 2.1. 古典ラテン語・俗ラテン語

スペイン語の接続法過去形 RA 形と SE 形はそれぞれラテン語の直説法と接続法の過去完了(pluscuamperfecto)に遡る。

(Beltrán 1999: 172-174, Molina Yévenes 1993: 180-182)

-*IS-	直説法	接続法
Pret. Perf.	(-Ī, -ISTĪ, -IT, -IMUS, -ISTIS, -ĒRUNT)	* <b>-IS-Ī</b> > <b>-ERĪ-</b>
Pret. Plusc.	* <b>-IS-Ā</b> > <b>-ERĀ</b>	* <b>-IS-SE</b> > <b>-ISSE</b>
Fut. Perf.	* <b>-IS-O/E</b> > <b>-ERI-</b>	-

表-1: ラテン語の直説法と接続法の完了時制

ラテン語では過去の非現実仮想として，条件文の仮定節でも帰結節でも接続法過去完了が用いられた。

例：Tu vellem ego **adesses**: nec mihi consilium nec consolatio **deesset** (Cic.)

‘Yo quisiera que **estuvieses** presente: no me **faltaría** ni consejo ni consuelo.’

(Calero Calero 2003: 116).

印欧祖語のアオリストの接尾辞-**\*IS-** (Segura Munguia 2004: 87)

**S** が母音間で **R** に変わる音韻変化(rotacismo)によって、上の表のほぼ全体で **R** が出現した。

一方、接続法の大過去(Pret. Plusc.)では「完了」の形態素-**\*IS-**の **S** が母音に挟まれていなかったため **S** が保持された。

不定詞でも rotacismo が起きたため(\*AMĀ-S-I > AMĀRE ),  
後代にスペイン語の過去推量形(不定詞+*ía* : *cantaría*,  
*tendría*)と R を共有することになった。

このことが-ERĀ に由来する RA 形が-ISSE に直接由来する  
SE 形を凌駕することの下地になったと考える。



一方、Herman (1997: 92)によれば、ロマンス語が分岐する以前(6-10 世紀)の俗ラテン語で«haber»+PP が複合完了形として最初に形成された。

その後、ルーマニア語を除くロマンス語圏全域で«haber»+PP が完了形として完全に文法化した。

ただし、ポルトガル語と古スペイン語の過去完了形はラテン語形(RA)を保持した。

スペイン語の«haber»+PP が遅れて発達したことが接続法過去 RA 形の発達を促した、と考える。

## 2.2. ロマンズ語圏

Lausberg (1973: II. 285) :

接続法過去はサルジニアを除くロマンス語圏全体で単なるラテン語の過去形よりも意味が強いラテン語の過去完了形 (SE 形) が用いられるようになった。

スペイン語も初めは他のロマンス語と足並みを揃えて接続法過去は SE 形であった。

片岡(1982a: 301) :

ラテン語の直説法過去完了はひとりイベリア・ロマンス語(スペイン語, ポルトガル語)にのみ継承されて, その他のロマンス語では助動詞の直説法未完了過去+過去分詞から成る迂説形にとって代られて消滅した(...). もっともその後この直説法過去完了はポルトガル語ではその法的意義も時称的意義も何ら変ることなく継続されたが, スペイン語では法的意義も時称的意義も変って接続法未完了過去となり直説法過去完了には他のロマンス語と同じように助動詞の直説法未完了過去+過去分詞から成る迂説形が用いられることになった。

片岡(1982b: 279-281) :

ロマンス諸語の接続法過去形について、ほとんどが SE 形をとるが、スペイン語だけに SE / RA の交替が見られる。

it. *amassi*, fr. *aimasse*, sp. *amase / amara*, po. *amasse* (ルーマニア語では迂説形)

ロマンス諸語の直説法過去完了形と接続法過去形が個別に説明されているが、イベリア半島ロマンス語を見ると、両者が関連していることがわかる。

現在のイベリア半島ロマンス語圏でもロマンス語圏全体と同様に接続法過去は唯一 SE 形に限られ, castellano だけに加えて RA 形が見られる(Andrés Díaz 2013: 507)。

Andrés Díaz (2013: 599-601) 直説法過去完了の段階的移行 :

西 : portugués, gallego, mirandés, asturiano: RA (古形が残存)

中間 : castellano: RA → «haber» + PP (古形が新形に変化)

東 : aragonés, aranés, catalán: «haber» + PP (早期に新形)

## 2.3. スペイン語史

Ridruejo (1990: 370):

12-13 世紀のスペイン語では RA 形がラテン語の直説法過去完了またはアオリストの機能を維持していた。

それとは別に RA 形は条件文の帰結節にも用いられていた (*Si lo toviesse, gelo diera 'si lo tuviese, se lo daría'*: Torrens Álvarez 2018: 110)。

これがやがて仮定節にも用いられるようになった (*Si lo tuviesse / tuviera, gelo diera*: Torrens Álvarez, loc. cit.)。

中世末期に **RA** 形は条件文に限らず，一般に接続法過去形として使われるようになった (Lapesa 2000: 852-853, Penny 2006: 235)。

直説法過去完了の第二形態«haber» + PP:

スペイン・ポルトガルで *había PP* の成立が遅れ，代わりに RA 形が継続して使用されていた。

しかし，スペインではポルトガルよりも早く *había cantado* が成立し(Veiga 2006: 205-206)，直説法過去完了として RA 形は使用されなくなった。



Eberenz (2004: 627-629):

RA 形 : 「過去 (点過去, 線過去)の前の時点」を示す

había PP: 「過去の行為の結果」を示す

が合流して RA と había+PP が競合し, 15 世紀後半に過去完了として había PP が定着した。

スペイン語の RA 形の機能の歴史的変遷：

RA-1. 直説法過去完了

RA-2. 条件文帰結節で条件法(過去推量)

RA-3. 条件文仮定節で接続法過去

RA-4. 条件文仮定節以外で接続法過去

Marcos Marín (1982: 200, 一部改変):

*	仮定節	帰結節
反実仮想現在	-RA (-SE > 0)	-RÍA (-SE > 0)
反実仮想過去	(-SE)	-RA (-SE > 0)
新時制	[hubiera~se cantado]	[hubiera~habría cantado]

表-2: スペイン語の反実仮想文

RA 形(直説法過去完了) が RÍA 形の領域(直説法過去推量)に合流したのは両者の音韻(R, A)と意味(‘si lo supiera, te lo *dijera*’ 「過去完了：…してしまっていた」と‘si lo supiera, te lo *diría*’ 「過去推量：…しただろう」)の類似による。

一般に過去完了と過去推量の間には大きな意味の違いがあるが、条件文の帰結節という環境では、たとえば「私が知っていたら君に教えてあげていた(のに)」(過去完了)と「私が知っていたら君に教えただろう」(過去推量)のように、両者は近似する。

RA 形は「過去の行為の結果」(Eberenz 2004: 628)を示すのに対し、RÍA は過去の事実でないことを想像する。どちらも条件文の帰結節として可能であるが、その違いは RA 形が直接的・断定的であるのに対し、RÍA 形は間接的・非断定的であることである。よって、RA 形は口語に多く現れることが予想される(後述 : sec. 3.1)。

後に条件文の仮定節 **SE** 形が **RA** 形に変化したのは、先述のように仮定節と帰結節の形態を同一化したためである。

やがて、過去を示す条件文で«haber»+PP が使われるようになるが、そのとき **Si hubiera + PP, hubiera + PP** が優勢になる。帰結節には **habría + PP** も使われるが、仮定節と帰結節の形態を完全に同一化するほうが好まれたようだ。

Keniston (1937: 411-412): 16 世紀スペイン語の条件文の型

*Si tuviese, daría; Si tuviese, diese; Si tuviese, daba; Si tuviese, habría dado, Si tuviese, diera, Si tuviera, daría; Si tuviera, diera; Si hubiese tenido, daría.*

ここで SE 形と RA 形だけに注目すると, Si SE, SE; Si SE, RA; Si RA, RA は存在したが, 唯一, \*Si RA, SE だけが欠けている。

この理由は, 先に見たように, 帰結節の RÍA 形 → RA 形の変化と仮定節と条件節の形態の同一化が頻繁に起こったことにある。

帰結節に SE 形が使われるは仮定節に SE 形があるときに限られる。

これは RÍA 形→SE 形という帰結節の範列的变化によるものではなくて(RÍA 形と SE 形は語形が非常に異なる), 「仮定節 SE → 帰結節 SE」の統辞的同一化の結果と考える。よって, \*Si RA, SE が生まれる余地はなかった。

Si SE←RA, RÍA←RA という基本的構造が認められる。



Branza and Heuven (2005: 30-32)の文献調査(アメリカ移住者の書簡) :

16-17 世紀に「仮定節」(hypothetical clauses)で RA 形が多用され, 逆に名詞節, 関係節などの「非仮定節」(Non-hypothetical clauses)では SE が多用されていた。このことは  $Si\ SE \leftarrow RA, R\acute{I}A \leftarrow RA$  の基本的図式を支持している。

このようにして RA 形は現在の反実仮定の假定節で SE 形と合流し、後にこれを凌駕したが、RA 形と RÍA 形の音韻と意味が類似していたこと、および RA 形が動詞パラダイムの中で自由であったことが大いに影響したと考える。

そして、RA 形と SE 形の変化系列（パラダイム）全体が -ra- / -se- を除けば完全に一致していたために、異形態素 (alomorfo) として記憶・共用することの話者・書き手の負担は少なかったことも考慮すべきである。

## 2.4. 現代スペイン語

Real Academia Española (1973: 481):

口語では一般に SE 形が優勢であり, RA 形は教養語や文学作品で多く使用される。

Alarcos (1994: 158)や Fukushima (2016: 65)のインフォーマント (8, 13, 17, 23, 25)の意見は逆である(インフォーマント 10 は例外)。

Bolinger (1956; 1991: 277):

RA 形には「温かみ, 近接性」('warmer and more immediate),

SE 形には「突き放し, 無関心, 非現実性」など('remoteness, detachment, hypothesis, lack of interest, vagueness, greater unlikelihood')の意味がある。

それが正しいければ歴史的に RA 形が RÍA 形(推量の意味から表現が婉曲的)と同化したことによるのかもしれない。

このような「温かみ」のある意味特徴をもつ RA 形(→RÍA 形)のほうが，冷淡な SE 形よりもとくに口語で好まれたために，使用頻度が高くなった。

現代スペイン語では次のように過去推量形の代わりに接続法過去 RA 形が使われることがある (Seco 1961: s.v. potencial : ¡*Nadie lo creyera!*)。

このとき接続法過去 SE 形が使われない理由は、条件文帰結節の RÍA 形 → RA 形という歴史的変化にある (Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española 2009: 1808)。

接続法過去 **SE** 形は名詞節で多く用いられ，**RA** 形は仮定節で多く用いられる，という Rojo (1996: 686-687)の観察も同じように歴史的な説明が可能である。

McKinnon (2018: 22)の Catalunya の新聞の読者投稿欄の調査:  
quedase のように catalán と同語源(quedés)である場合のほうが、  
cat. arribar, esp. llegar のように語源が異なる場合と比べて、  
SE 形が頻度が高い。



Kempas (2011: 259)による地理分布のアンケート調査：

Galicia と Cantabria (Santander)で SE 形の頻度が高い。

Galicia についてはガリシア語で RA 形が直説法過去完了で使用されているために、接続法過去との同音衝突を避けた、と説明している。

このように、Cataluña と Galicia では、それぞれ catalán と gallego の影響で SE が多く使用されている。

それでは Cantabria (Santander) のスペイン語で SE 形の頻度が高い理由は何であろうか。

この理由を探るには Cantabria (Santander) だけを取り上げて考察するのではなく、さらに広範囲な調査(スペイン語圏全体の歴史的地理的調査)が必要である(sec. 3.1, 3.2, 3.3)。

## 3. 資料の分析

### 3.1. CODEA

公証文書の歴史的資料 CODEA とその分析装置 LYNEAL を使用する。

GITHE(Grupo de Investigación Textos para la Historia del Español): CODEA+ 2015 (*Corpus de documentos españoles anteriores a 1800*) [en línea] Sitio web [6 de octubre de 2020]

<http://shimoda.llf.uam.es/ueda/lyneal/codea.htm> [6 de octubre de 2020]

FA	SE	RA	Suma	SE%	RA%
1250	61	62	123	49.6%	50.4%
1300	65	33	98	66.3%	33.7%
1350	228	59	287	79.4%	20.6%
1400	285	37	322	88.5%	11.5%
1450	364	32	396	91.9%	8.1%
1500	381	36	417	91.4%	8.6%
1550	318	95	413	77.0%	23.0%
1600	123	52	175	70.3%	29.7%
1650	213	35	248	85.9%	14.1%

1700	183	58	241	75.9%	24.1%
1750	168	62	230	73.0%	27.0%
Total	2389	561	2950	81.0%	19.0%

表-3: 接続法過去 SE 形と RA 形の歴史的変遷. CODEA

例文 : si **padeciera** con las enfermedades que tengo **muriera**, :: 1599, Extremadura // si **pareciese** bien a vuestra excelencia, **podría** otorgar{21} sus poderes a favor del doctor don Juan Díez{22} de Aux, :: 1774 Aragón // si **viniese** {17} a manos de don Luis, mi{18} señor, se **enojaría** mucho, :: 1581, \* // si **hubiera allado** la puerta abierta, **ubiera entrado**. :: 1747

Andalucía // si **huviera venido, estuvieran** juntos como{14}  
pueblo escogido de Dios.:: 1756 Castilla la Nueva

このように 18 世紀まで SE 形のほうが常に優勢であった。

後で見るように(sec. 3.2, 3.3), 現代では RA 形のほうが圧倒的に優勢であるので, SE 形→RA 形という交替が比較的最近(19-20 世紀)に急に起きたように見える。

公文書(Official: cancelleresco, judicial, municipal, eclesiástico)  
と私文書(Particular)の比較 :

SE	Oficial	Particular	RA	Oficial	Particular	RA %	Oficial	Particular
1250	49	12	1250	57	5	1250	53.8%	29.4%
1300	43	22	1300	31	2	1300	41.9%	8.3%
1350	208	20	1350	55	4	1350	20.9%	16.7%
1400	204	81	1400	19	18	1400	8.5%	18.2%
1450	312	52	1450	28	4	1450	8.2%	7.1%
1500	317	64	1500	23	14	1500	6.8%	17.9%
1550	257	61	1550	60	35	1550	18.9%	36.5%
1600	104	19	1600	29	23	1600	21.8%	54.8%

1650	178	35	1650	14	21	1650	7.3%	37.5%
1700	160	24	1700	40	18	1700	20.0%	42.9%
1750	89	79	1750	16	46	1750	15.2%	36.8%

表-4: 公文書と私文書における RA 形の使用率. CODEA



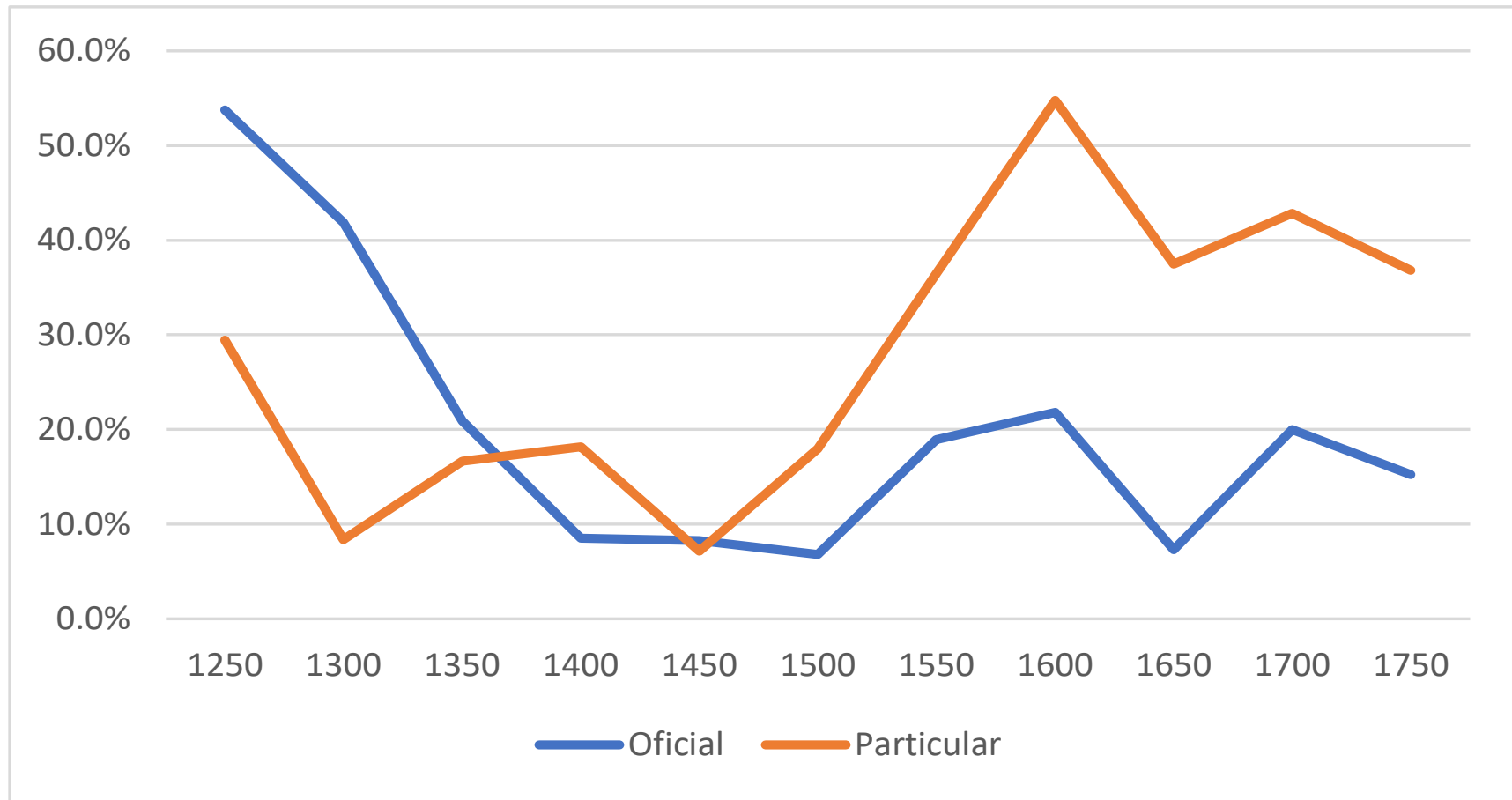


図-1: 公文書と私文書における RA 形の使用率. CODEA

公文書では初期に RA 形が優勢であったが、中世末期(1400, 1450, 1500)になると僅少となった。

一方、私文書では逆に RA 形が中世では劣勢であったが近代になると急に上昇している。

公文書は社会的上層の文語を示し、私文書は民衆の口語の性格を示す。

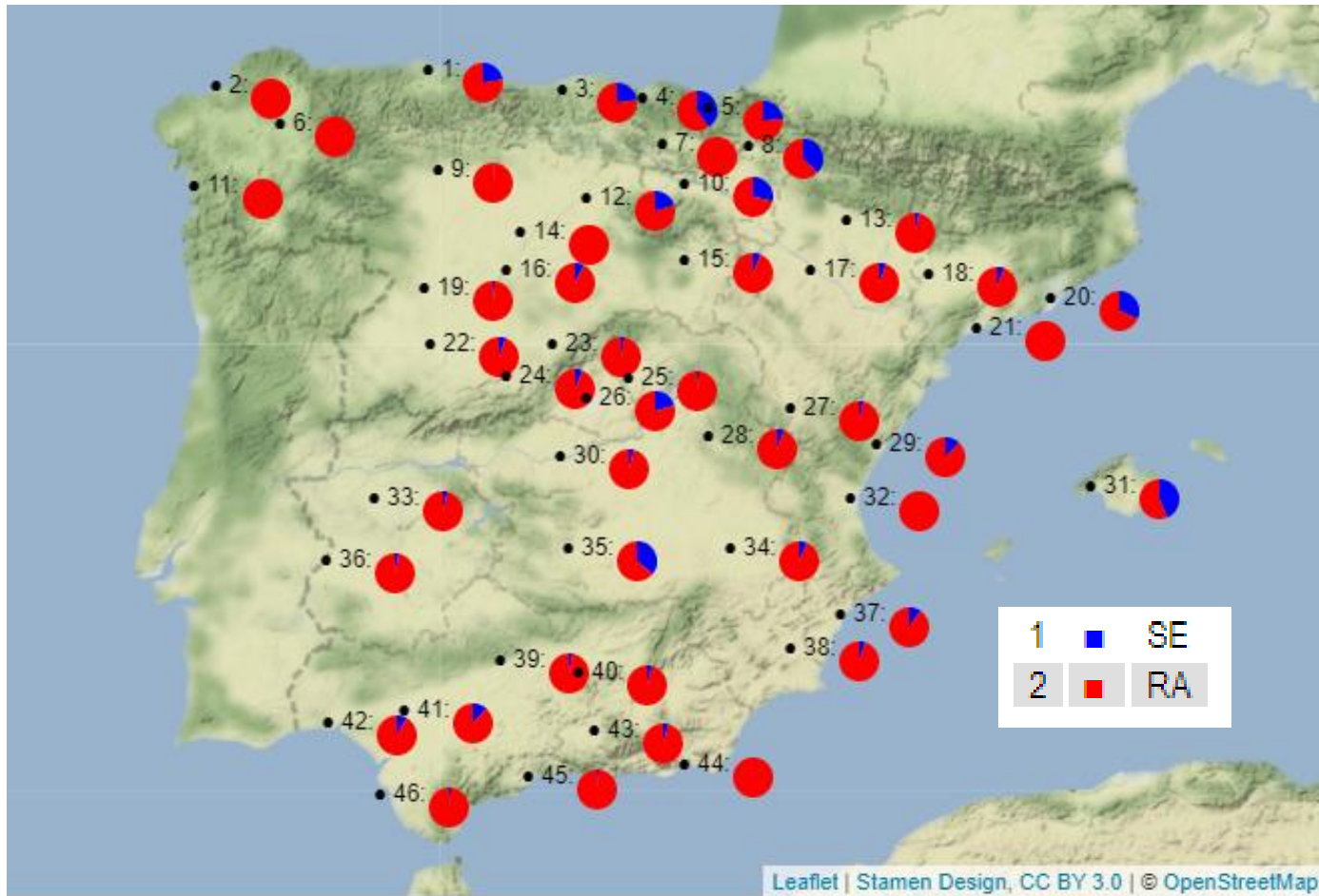
SE 形→RA 形の推移は長期に渡る「下からの言語変化」(change from below)である。

## 3.2. COSER

イベリア半島の口語資料 COSER コーパスと LYNEAL 分析プログラム :

Inés Fernández-Ordóñez (dir.) (2005-): Corpus Oral y Sonoro del Español Rural . <[www.corpusrural.es](http://www.corpusrural.es)> [6 de octubre de 2020]  
ISBN 978-84-616-4937-2

<http://shimoda.llf.uam.es/ueda/lyneal/coser.htm>



☒-2:

SE% :

RA%.

COSER

スペイン全体の SE 形の使用率は 8.9%だが，そのバラツキが大きい(SD: 11.8)。

SE 形の残存が顕著：

イベリア半島の北部(1: Asturias, 5: Guipúzcoa, 8: Navarra, 10: La Rioja, 12: Burgos)

中部(26: Madrid, 35: Ciudad Real)

カタルーニャ地方(20: Barcelona, 29: Castellón, 31: Islas Baleares)

アンダルシア地方(41: Sevilla)

COSER は口語資料なので RA の主観的推量が働いて RA 形が圧倒的に優位を占めている。

インフォーマントは田園に生活する高齢者なので、地域によって伝統的な SE 形も比較的多く記録されている。

例文 : si **estuviera** aquí don [NP] también les **informaría** de to lo que quisieran. :: Cuenca // si **tuviera** ahora veinte años menos, ¿qué cosas me **cambiaría** yo? :: Guipúzcoa // si **hubiera estao** aquí, a lo mejor **hubiera aprendío**, pero... :: Cuenca // si **hubiera venío** aquí, lo **hubieran fusilao**, :: Jaén // Si **hubiese habido** un poquito de respeto o cualquier cosa pues a lo mejor no **hubiera llegado** a tanto la cosa. :: Ciudad Real

### 3.3. PRESEEA

スペイン語圏を含む現代の社会言語学的口語資料  
PRESEEA コーパス :

PRESEEA (2014-): *Corpus del Proyecto para el estudio sociolingüístico del español de España y de América*. Alcalá de Henares: Universidad de Alcalá.

<http://preseea.linguas.net>]. Consultado: 6 de octubre de 2020.

<http://shimoda.llf.uam.es/ueda/lyneal/preseea.htm>

	Ciudad	SE	RA	Suma	SE %	RA %
1	CU-La Habana	20	286	306	6.5%	93.5%
2	MX-Mexicali	1	129	130	0.8%	99.2%
3	MX-Monterrey	1	171	172	0.6%	99.4%
4	MX-Guadalajara	1	161	162	0.6%	99.4%
5	MX-México, D. F.	5	294	299	1.7%	98.3%
6	GU-Guatemala	1	197	198	0.5%	99.5%
7	CO-Barranquilla	9	178	187	4.8%	95.2%
8	CO-Medellín	9	229	238	3.8%	96.2%
9	CO-Pereira	15	135	150	10.0%	90.0%
10	CO-Cali	0	145	145	0.0%	100.0%



11	VE-Caracas	18	145	163	11.0%	89.0%
12	PE-Lima	26	108	134	19.4%	80.6%
13	CH-Santiago de Chile	30	175	205	14.6%	85.4%
14	UR-Montevideo	2	104	106	1.9%	98.1%
15	ES-Santander	39	84	123	31.7%	68.3%
16	ES-Santiago de Compostela	20	250	270	7.4%	92.6%
17	ES-Alcalá de Henares	21	117	138	15.2%	84.8%
18	ES-Madrid	45	132	177	25.4%	74.6%
19	ES-Valencia	42	154	196	21.4%	78.6%
20	ES-Sevilla	15	132	147	10.2%	89.8%
21	ES-Granada	8	142	150	5.3%	94.7%

22	ES-Málaga	19 204	223	8.5%	91.5%
	Total	347 3672	4019	8.6%	91.4%

表-6: SE% : RA%. Ciudad. PRESEEA

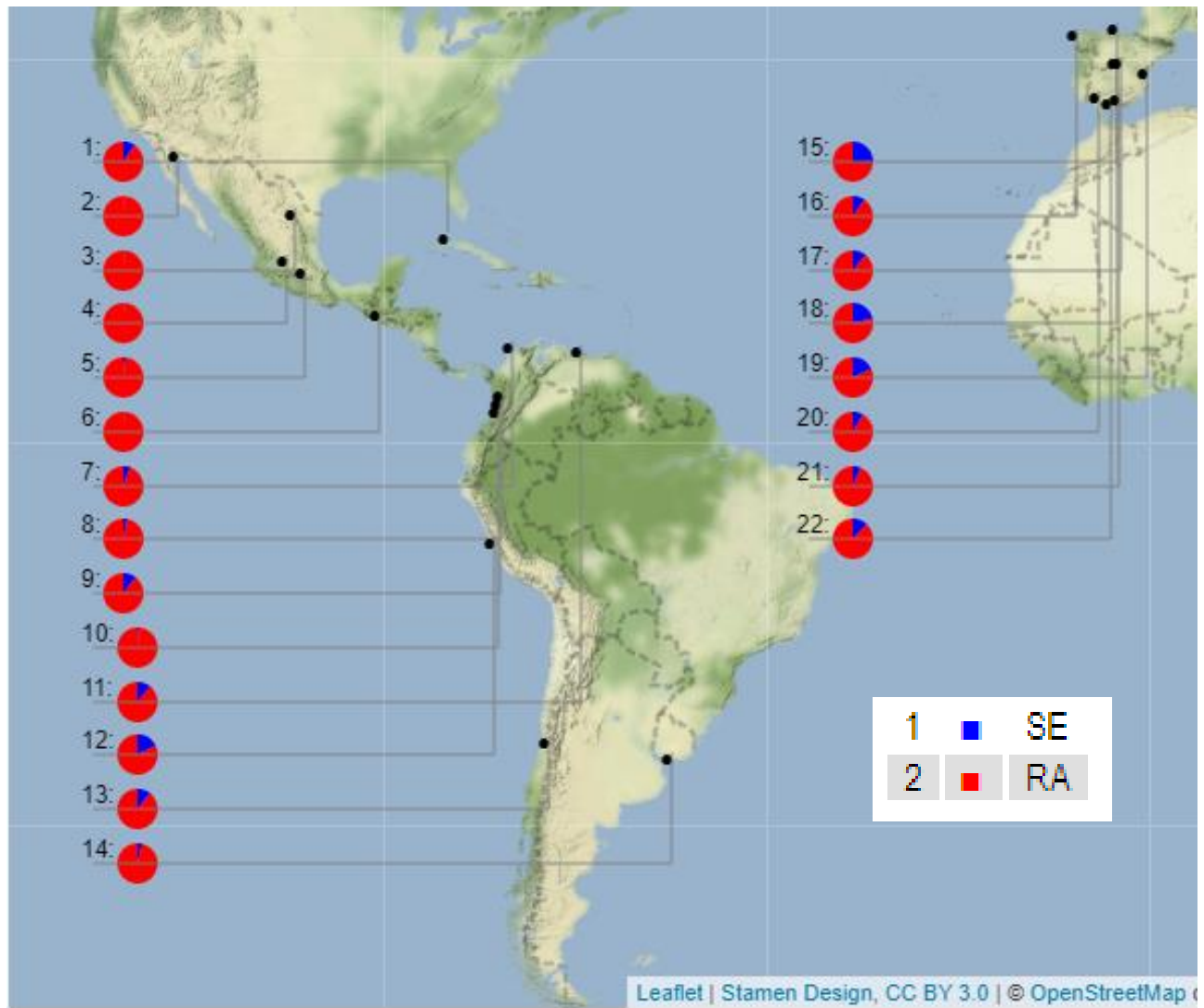


図-3: SE% / RA%.  
PRESEEA

ラテンアメリカでもスペインでも RA 形が圧倒的に多いが、これは RA 形の主観的な「推量」の意味が口語で多く使われているためである。

SE 形が 10%以上使われている都市はラテンアメリカでは 9: Pereira (CO), 11: Caracas, 12: Lima, 13: Santiago de Chile であり、スペインでは 15: Santander, 17: Alcalá de Henares, 18: Madrid, 19: Valencia である。これらの使用は古形の残存による。Madrid では SE 形が 25.4%を占めているが、これは中心地に出現した新語形を示すものではなく、逆に守旧的な残存形(古形)である(sec. 2)。

例文 : si **encontrara** una persona así igual me **sentiría** rara :: CH-Santiago de Chile // si **estuviera** en una oficina encerradito con el aire acondicionado pues **sería** distinto :: ES-Sevilla // si **hubiera** un gobierno mejor / el dólar no **estuviera** a lo que está:: VE-Caracas // si **tuviese** que hacer un viaje me **iría** a Nueva York :: ES-Madrid // si **hubiera sido** millonario // en mis circunstancias socioeconómicas / **hubiera hecho** derecho otra vez :: ES-Madrid // si **hubiera sido** un tiempo atrás // sí me **hubiera gustado** mucho algo de / de / de contabilidad de de de números / me **hubiera gustado** mucho :: CO-Cali // si **hubiese estado** soltero en ese momento // aah / **hubiese sido** diferente

pues / aparte que tenía mi motito :: CH-Santiago de Chile // si **hubiese habido** / si ha hubiese habido malos profesores malas / este / eeh directores ¿ya? // yo me imagino que esos colegios no **hubieran funcionado** :: CO-Barranquilla.

- Si RA, RÍA / RA / \*SE; Si SE, RÍA / RA / SE

- Si hubiera PP, hubiera PP; Si hubiese PP, hubiese PP; Si hubiese PP, hubiera PP; \*Si hubiera PP, hubiese PP.

先述のように SE 形は歴史的に格式がある文語で使用されていた(sec. 3.1)。よって、現代の SE 形の使用率は教育レベルの高さに比例するはずである。

Ciudad / SE%	Nivel: 1-2	Nivel: 3
ES-Santander	45.8%	17.8%
ES-Madrid	26.2%	18.6%
ES-Alcalá de Henares	16.0%	11.1%
PE-Lima	23.3%	10.2%
CH-Santiago	13.5%	8.0%

表-7: SE 形の使用率(%)と教育レベル

(Nivel-1: 初等教育, 10-12 歳まで; Nivel-2: 中等教育, 16-18 歳まで; Nivel-3: 高等教育, 21-22 歳まで)

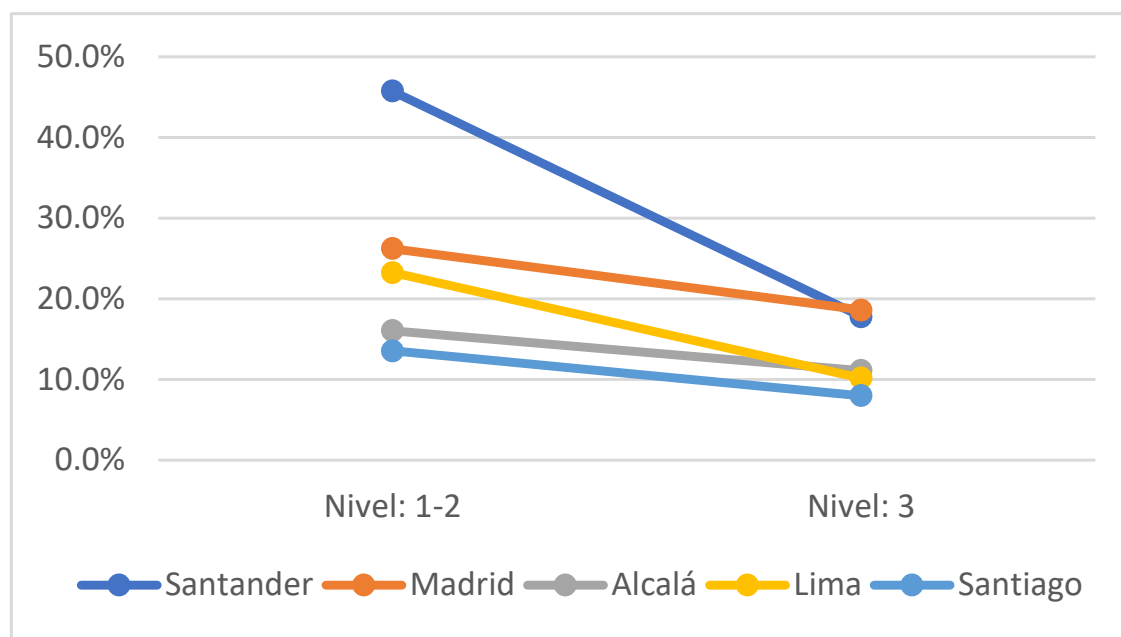


図-4: SE 形の使用率(%)と教育レベル



先に見たように、SE 形→RA 形の変化が「下からの変化」であるならば(sec. 3.1), SE 形の使用率は高等教育を受けた Nivel-3 が高くなるはずである。

ところが予想に反して、上の図が示すように、5 都市で一致して Nivel-3 の使用率が低い。

ここに新たな特徴として「伝統」と「革新」を導入する必要がある。

これは教育レベルが低いグループ(Nivel-1, 2)が「伝統」(SE 形)を維持し、教育レベルが高いグループ(Nivel-3)が「革新」(RA 形)を支持した、という可能性を考える。

## 4. 結論

仮説(1)：ラテン語に遡る直説法過去完了 RA 形が過去推量形 RÍA 形に代わって用いられたのは，両者の音韻の類似(R, A)と意味の類似（直説法過去完了・直説法過去推量）による。

ラテン語に遡る直説法過去完了 RA 形(RA-1)が条件文帰結節の直説法過去推量形 RÍA 形と合流したのは，両者の音韻・意味が類似したことによる，と考える。

RA-1 と RÍA は音韻 R, A を共有し，文法機能も直説法・過去を共有し，とくに条件文の帰結節においては意味が類似していた。

RA-1 ではこれに「完了」が加わり，RÍA では「推量」が加わるが，両者の形態と機能・意味の弁別は最小(1 個: 完了/推量)であった。

こうして過去推量の RÍA と合流した RA-2 は，条件文の連辞的な同一化作用(Si RA-3, RA-2)によって条件文の仮定節にも用いられた(RA-3)。

このとき RA-3 形が接続法過去の機能を獲得し、これが条件文以外にも適用された(RA-4)。

逆に、競合する SE 形は以上の特徴をすべて欠いていた。

さらにその音韻 S が「完了」と「推量」のパラダイムの中で孤立していたために RA 形・RÍA 形と合流することはなかった(sec. 2.1)。

一方、SE 形の利点はラテン語直系の形式を継承したことである。

すなわち、いかなる変化も経ないで、そのまま接続法過去を表現できた。

このことが SE 形が現代に至るまで連綿と使用され続けた理由であろう。

仮説(2)：歴史的に SE 形=文語+伝統：RA 形=口語+革新という文体の差異があった。この文体の差異は大小の程度の違いはあるが現代のスペイン語使用者にも残存している。

接続法過去 SE 形と RA 形の使用率について歴史資料を見ると、比較的最近(19-20 世紀)になって一気に SE 形を凌いで RA 形が優勢になったように見える(sec. 3.1, 3.2, 3.3)。

これは、使用した現代の資料が口語であるのに対し(sec. 3.2, 3.3), 歴史資料が必然的に書記言語であるためであろう(sec. 3.1)。

しかし、歴史資料（書記言語）の中で私文書だけは比較的よく口語を反映している，と思われる。

そこで公文書と私文書の歴史的変遷を比較すると，近代において私文書で RA 形が多く使用されるようになったことがわかった(sec. 3.1)。

よって SE 形から RA 形の歴史的移行は異常な突発的な変化ではなく，口語文体の長期に渡る自然な段階的変化であった。

社会言語学的要因を考慮した現代スペイン語資料によると、SE形は初等・中等教育を受けたグループに比較的多く残存し、高等教育を受けたグループでは比較的少ない(sec. 3.3)。

よって教育レベルは文語(SE形)：口語(RA形)の差異を示すのではなく、伝統(SE形)：革新(RA形)の差異を示しているようだ。



仮説(3): SE 形(古語形)と RA 形(新語形)の地理的分布は「分離分布する語形が古く(SE 形), 連続分布する語形が新しい(RA 形)」という一般的な傾向に合致する。SE 形の多地域の分布は SE 形→RA 形の変化の完了が最近であったことを示す。

現代の接続法過去 SE 形はとくにイベリア半島とラテンアメリカの多くの地域で分離して観察される(sec. 3.2, 3.3)。

「新言語学」(Neolinguistics)は、交通の便が悪く孤立した地域、周辺的な地域、広大な地域に見られる語形の方が、交通の便がよい地域、中心的な地域、小地域に見られる語形よりも古い、という原則(norm)を掲げたが、Chambers and Trudgill (1998: 168)はこれを「指針」(guideline)とした。

この原則に照らせば古形である SE 形は「交通の便が悪く孤立した地域、周辺的な地域、広大な地域」に多く分布するはずであるが、現実の分布は中心地も周辺地域(辺境)も区別なく含めているので、それとは異なる(sec. 3.2, 3.3)。

Chambers and Trudgill (*loc. cit.*)は、各地に分離して分布する語形の方が地域が連続した語形よりも古いという傾向がある、と述べている。

なぜならば、逆に各地に分離して分布している語形が新しいとすると、各地に同時に独立して新語形が発生したことになり、これはほとんど不可能だからである。

SE 形がスペイン語圏の各地に分離している。

そこで、SE 形が古形であることが、各地に分離して残存している理由として挙げられる。

現代の地理的資料によって、SE 形が各地に分離して分布し

ているだけでなく、多くの地点に分布していることが確認できた(sec. 3.2, 3.3)。

SE 形が多くの地点に分布していることは SE 形→RA 形という相対的比率の長期に渡る歴史的変化が比較的最近に完了したことを示している。

SE 形→RA 形という長期の変化の完了時期が最近であったために、未だ SE 形が多くの地点に残存している、と考えられる。

## 5. 引用文献

Alarcos Llorach, E. (1994) *Gramática de la lengua española*. Madrid. Espasa Calpe.

Andrés Díaz, R. (2013) *Gramática comparada de las lenguas ibéricas*. Gijón. Ediciones Trea.

Beltrán, J. A. (1999) *Introducción a la morfología latina*. Zaragoza. Universidad de Zaragoza.

Bolinger, D. (1956; 1991) “The Subjunctive *-ra* and *-se*: ‘Free Variation’?”, *Hispania*. 39: pp. 345-349; in *Essays on*

*Spanish: Words and Grammar*. Newark. Juan de la Cuesta, pp. 274-282.

Branza, M. and van Heuven, V. J. (2005) “Linguistic variation in the *subjuntivo imperfecto* in Spanish America in the 16th century”, in Doetjes J.S., Weijer J.M. van de (eds.) *Linguistics in the Netherlands 2005*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 25–36.

Calero Calero, F. (2003) *Sintaxis latina*. Madrid. Universidad Nacional de Educación a Distancia.

Chambers, J. K. and Trudgill, P. (1998) *Dialectology*. Cambridge. Cambridge University Press.

Dauzat, A. (1922) *La géographie linguistique*. Paris. Librairie Ernest Flammarion.

Eberenz, R. (2004) “Cambios morfosintácticos en la Baja Edad Media”, en Cano, R. (coord.) *Historia de la lengua española*. Barcelona. Ariel. pp. 613-641.

Fukushima, N. 福寫教隆(2016). “Amara y amase”, 『現代スペインの諸言語の形態論についての対比的な研究』科学研究費研究成果報告書, pp. 54-161.

Herman, J. (1997) *El latín vulgar*. Barcelona. Ariel.

Jurado Dueñas, A. (2018) “Las formas *cantara* y *cantase* en las lenguas iberorrománicas”, *Revista de Lenguas y Literaturas Catalana, Gallega y Vasca*, 23, pp. 57-79.

Kany, Ch, E. (1970) *Sintaxis hispanoamericana*. Madrid. Gredos.

Kataoka, K. 片岡孝三郎 (1982a) 『ロマンス語歴史文法』 (*Gramática histórica de las lenguas románicas*) 東京. 朝日出版社.

\_\_\_\_\_. (1982b) 『ロマンス語比較文法』 (*Gramática comparativa de las lenguas románicas*) 東京. 朝日出



版社.

- Kempas, I. (2011) “Sobre la variación en el marco de la libre elección entre *cantara* y *cantase* en el español peninsular”, *Moenia*, 17, pp. 243-264.
- Keniston, H. (1937) *The Syntax of Castilian Prose. The Sixteenth Century*. Chicago. The University of Chicago Press.
- Lapesa, R. (2000) *Morfosintaxis histórica del verbo*. II. Madrid. Gredos.
- Lara Bermejo, V. (2019) “El pretérito imperfecto de subjuntivo en la Península Ibérica del siglo XX”, *Verba*. 46, pp.

313-338.

Lausberg, H. (1973) *Lingüística románica*. Madrid. Gredos.

Lincoln Canfield, D. and Cary Davis, J. (1975) *An Introduction to Romance Linguistics*. London. Southern Illinois University Press.

Marcos Marín, F. (1982) “Observaciones sobre las construcciones condicionales en la historia de la lengua española”, en Marcos Marín, F. (coord.) *Introducción plural a la gramática histórica*. Madrid. Cincel. pp. 186-204.

Martínez Amador, E. M. (1974) *Diccionario gramatical y de dudas del idioma*. Barcelona. Editorial Ramón Sopena.

McKinnon, S. (2018) “An initial examination of imperfect subjunctive variation in Catalanian Spanish: A contact linguistics and usage-based approach” In J. E. MacDonald (Ed.), *Contemporary trends in Hispanic and Lusophone linguistics: Selected papers from the Hispanic Linguistic Symposium 2015*. John Benjamins: Amsterdam/Philadelphia. pp. 333-353.

Molina Yévenes, J. (1993) *Iniciación a la fonética, fonología y morfología latinas*. Barcelona. Universitat de Barcelona.

Moll, F. B. (2006) *Gramática històrica catalana*. Universitat de València.

Penny, R. (2006) *Gramática histórica del español*. Barcelona. Ariel.

Ramsey, M. M. (1956) *A Textbook of Modern Spanish*. New York. Holt, Rinehart and Winston.

Real Academia Española. (1973) *Esbozo de una nueva gramática*

*de la lengua española*. Madrid. Espasa-Calpe.

\_\_\_\_\_ y Asociación de Academias de la Lengua Española (2009)  
*Nueva gramática de la lengua española.*  
*Morfología Sintaxis I*, Madrid. Espasa Libros.

Ridruejo, E. (1982) “La forma verbal en -ra en español del siglo XIII (oraciones independientes)”, en Marcos Marín, F. (coord.) *Introducción plural a la gramática histórica*. Madrid. Cincel. pp. 170-185.

\_\_\_\_\_. (1990) “¿Cambios iterados en el subjuntivo

español?” en Bosque, I. (ed.) *Indicativo y subjuntivo*. Madrid. Taurus Universitaria

Rojo, G. (1996) “Sobre la distribución de las formas *llegara* y *llegase* en español actual”, *Scripta philologica in memoriam Manuel Alvar*. Taboada Cid, Universidade da Coruña, pp. 677-691.

Seco, M. (1961) *Diccionario de dudas y dificultades de la lengua española*. Madrid. Aguilar.

Segura Munguia, S. (2004) *Gramática latina*. Bilbao. Universidad de Deusto.

- Shibata, T. 柴田武 (1978) 「方言周圈論」 (“Teoría de la periferia dialectal”) 『講座日本の民俗 1. 総論』東京. 有精堂 (『方言論』東京. 平凡社. pp.496-513)
- Torrens Álvarez (2018) *Evolución e historia de la lengua española*. (2a ed.) Madrid. Arco / Libros.
- Trask, R. L. (2000) *The Dictionary of Historical and Comparative Linguistics*. Edinburgh University Press.
- Veiga, A. (2006): “Las formas verbales subjuntivas. Su reorganización modo-temporal”, en C. Company (dir.): *Sintaxis histórica de la lengua española*.

México D.F.: UNAM / Colmex, pp. 95-240.

Yanagida, K. 柳田国夫 (1927) 「蝸牛考」 (“Sobre ‘caracol’”)  
『人類学雑誌』 42 (『日本の言語学 6. 方言』, pp. 245-  
282).